

タイトル



隣のお姉ちゃんはお手懐けたい

目次

- 一章 お姉ちゃんはシヨタ君のおちんちんを勃起させたい
- 二章 お姉ちゃんはシヨタ君の童貞を食べちやいたい
- 三章 お姉ちゃんは美人なママもシヨタ君の餌にしちやいたい
- 四章 お姉ちゃんは親友の処女おまんこをシヨタ君にプレゼントしたい
- 終章 お姉ちゃんはシヨタ君を飼いたい

タイトル

一章 お姉ちゃんはシヨタ君のおちんちんを勃起させたい

微細な歯車が回る微かな音が弾き出され、文字盤に刻まれたローマ数字の間を鋭利な影が小さく跳躍する。レースカーテンを透過する白い朝日が差し込む室内に、機械仕掛けの律動が静かに響いた。

(あと少し……もうちよつと……)

学習机に載せられた卓上時計を前にし、鷲塚直海わしづかなおみはじつと長針の行方を見守っている。家族の誰よりも早く朝食を食べ終え、洗い立ての制服に着替えて制帽まで被った少年は、もうすっかり登校の準備を終えていた。

(早く……もつと早く動いて)

熱望を込めた眼力で秒針を焚きつけるものの、時計は急くこともなければ緩やかに

なることもない。焦ったりサボったりもせず、ただ寡黙に、愚直に、正確に時間を指し示だけだ。

そんなことは直海にだってわかっている。わかっている。時計がまるで意地悪をしているように、針の速度が遅く感じた。

カチリーと、旋回を繰り返す秒針が、短針と長針を同時に動かす。

(やったっ)

午前八時になった瞬間、直海は弾けるように席を立った。教科書とノートがぎつしり詰まった通学鞆を腕に通し、意気揚々と両肩に担ぐ。自室から廊下に出ると、雀のホッピングを彷彿とさせる足取りで階段を駆け下りていった。

「パパ、おはようっ。学校、行ってくるね」

玄関を目前にして、思い出したようにダイニングへ通じる扉から顔を突き出す。独り遅れて朝食を摂っていた父——健吾が、納豆を掻き回していた箸を止め「おおう」とまだ寝たり無さげな眼を漫然と瞬かせる。

「車、気を付けるんだぞ」

「うん、わかってるよ」

直海の素直な返事に健吾は黙然と頷き、濛々と湯気を立てる白米に薬味混じりの納

タイトル

豆をどろりと落とした。

「直海、ハンカチはちゃんと持った？」

洗濯物が満載されたランドリーボックスを両手に、母——秋子あきこが浴室から出てくる。「持つてるよ」と返事をしながら、直海は学校指定の靴紐を結ぶ。

「この間、駅に行く道で事故があったんだから、車には気を付けるのよ」

「んもうっ、わかってるよ」

母からの注意に、直海は内心小さく立腹する。父母からすれば直海はまだ幼いのかもしれないが、鮎に釣られて知らない人に付いていく年齢でもない。寿司はまだわざわざ抜きじゃないと食べられないが、今年からはカレーは中辛まで食べられるようになってるし、無糖コーヒーも我慢すれば一口は飲める。

(今はママとパパに文句なんて言っている場合じゃない)

自分がどれだけ大人になっているのか両親へとくと言いかせたかったが、こんなところで立ち止まっている暇はない。約束の時間になったのだから、一分一秒でも早く家を出なくてはならなかった。

「いってきまーすっ」

振り返ることなく扉鍵を開け、直海は大きくドアを開いた。「いってらっしやい」

と父と母の唱和を背に受け、春の朝日の下へと駆けていく。ドアが閉まりきるよりも早く門を抜け、直海は我が家の敷地から公道へと降り立った。

はやる気持ちを抑えて門の門をかけ直すと、身体をくると右に回して歩き出す。視界の端に映る鷲塚家の塀がやがて途切れ、瀟洒な煉瓦塀へと切り替わる。

朱色の長方形が連なる長大な塀に沿ってしばらく歩いていると、やがて視界の中央に一人の少女が像を結んだ。

「雪お姉ちゃん、おはようっ」

「おはよう、直君。ふふ、今日も元気いっぱいみたいね」

隣家に住む年上の幼馴染み——三石雪音みいしゆきねに深刺とした挨拶をすると、門前に立った美少女がゆるりと振り向き、小さく微笑みかけてくれる。

（やっど、雪お姉ちゃんに会えた）

目覚まし時計より早く起床し、ずっと対面できるのを楽しみにしていた幼馴染みの全貌が、燦然と双眸に飛び込んで来る。

漆黒の虹彩が栄える、長い睫に彩られた双眸。清水で磨かれたように滑らかな高い鼻梁に、瑞々しく透き通った桜色の唇。色素の薄い栗色の髪は春の陽光に透け、セミロングの先端が少女の両肩を絶え間なく洗う。

タイトル

（クラスの女子とは、やっばり全然違うよ）

同級生の男子の間では、誰某が可愛いという話をちらほらと耳にするが、クラスで一番人気のある女子といえども、雪音と比べたらまるで敵わない。同じ女子でも、大學生の雪音と違って同年代の女子は全員例外なく単なる子供でしかなかった。

「いつも時間に正確ね。直君が遅刻したことなんて一度もないんじゃないかな」

「う、うん。人と待ち合わせをするなら、絶対に遅れちゃいけないって……ええと、その……パパに言われているから」

本当は一秒でも早く雪音に会いたいただけのだが、そんな秘密を当の本人を前にして暴露するわけにはいかない。嘘を吐くのは後ろめたかったが、父に託けることで直海は恥じらいの本音を隠した。

「それでも、きちんと約束を守る直君はとっても偉いよ」

「あ……う、うん」

雪音から褒められる——それだけで、胸から息苦しいまでの幸福を込み上げてくる。美味しいものを食べたり、友達と遊んだり、お風呂にゆっくり浸かっている時とは、まるで質の異なる幸せ。

（雪お姉ちゃんに良い子って言われるだけで、心臓がドキドキする）

脈拍が急激に高鳴り、未成熟な薄い胸板を力強い鼓動が打った。胸骨が揺れるほどの動悸は四肢の末端にまで火照った血潮を送り込み、幼い肌を朱く染めていく。

(雪お姉ちゃんと会うと、いつも身体がおかしくなっちゃう…：どうしてだろう)

それが世間で言うところの初恋であり、身体の変調は恋煩いから来る自然な反応なのだが、幼い直海に原因はわからない。まだ好意と恋心の違いもわかっていない男子は、小さな身体の中に芽生えた淡くも激しい衝動にただ苛まれるしかなかった。

「あれ、顔が赤いよ。ふふ、ひよっとして照れてる？ お姉ちゃんに褒められたのが、そんなに嬉しかった？」

「うっ…：ち、違うよ。そんなこと、ないもん」

クスリとおかしげに微笑んだ美少女が、直隠しひたかくにしている感情を見透かす。本音を言えば嬉しくて堪らないのだが、恥ずかしさから直海は衝動的に誤魔化してしまった。

「もう、嘔吐いちゃって。こうやって、頭ナデナデされるの、嬉しいクセに」

「う、嬉しくなんか、無いってば」

本心を覚られまいと虚勢を張る直海だったが、雪音はまったく意に介しない。そんな年下の強がりこそ好ましいとばかりに優しく頭を撫でてくる。

(雪お姉ちゃんの綺麗な手、とつても柔らかい)

タイトル

仄かな温かみを帯びた美少女の掌が、恋慕の熱を宿した直海の肌に被せられる。柔らかなめらかな美少女の肌理が、幼い男子の身体を痺れさせる。

(低学年の頃は、手を握って歩いていてもなんとも無かったのに)

もっと小さな頃は、大好きな雪音の手を自分から握りにいっていったものだ。それが、いつの間にか自粛するようになり、今では触れられるだけで身体が緊張してしまう。

脈拍はますます盛んになり、ドラムを叩かれているように耳孔に反響し、鼓膜を叩いた。

(雪お姉ちゃんの匂い…：頭がぼうつとしてきちゃうよ)

美少女の肩から流れ落ちたセミロングの髪から、鼻孔が蕩けるような甘くやわらかな匂いが振りまかれる。大輪の花々と熟れた果実を煮詰めたような、口内から涎を沸き立たせる女子大生の匂いは、直海の身体に更なる変化をもたらす。

(ああ、どうしよう。また、ちんちんが勃ってきちゃった)

火照りがピークに達すると、やがてショートパンツに隠されていた皮被りのペニスが、にわかには隆起を始める。恋愛はおろか性欲すら理解できていない直海にとって、勃起に伴う恥じらいは性欲が露呈してしまうことには起因しない。

それでも、小用を足す行為は、人に見られたら恥ずかしいものだと理解している。

性に目覚めていなくとも、幼く拙い動機で男根の膨らみを隠そうとするものの、直海の意に反して勃起は収まる気配がない。

(ううつ、雪お姉ちゃんのおっぱいがぶるぶるしてる)

直海の自制を嘲笑うかのように、女子大生の柔らかな膨らみが眼前に迫る。雪音が掌をおでこから頬へ移すと、少女の二の腕が乳房の曲線を歪ませ、より胸の膨らみを強調させた。

(どうして、おっぱいを見るとこんなにドキドキするんだろう)

ほんの二、三年前までは、女の乳房を見ても何も思うところはなかった。それなのに、近頃では愛読している少年マンガ誌で、水着のアイドルがグラビアを飾っているだけでも心臓が昂ぶってくる。

まして、大好きな雪音のものならば尚更だ。肌の露出が何倍も多いグラビアの水着女子より、しっかりと服を着込んでいる雪音の美乳の方が何十倍も興奮する。

(それだけじゃない……雪お姉ちゃんの脚だって……)

胸だけではなく、短くタイトなスカートから伸びる女子大生の脚も、いつからか直海の動悸を狂わせる一因となっていた。しなやかに伸びたふともも。なだらかにくびれた白い膝。たおやかな曲線を描くふくらはぎ。

タイトル

そして、繊細な脚肌を煌びやかに包み込むストッキングの輝きが、どうしようもなく不穏な疼きを少年の股間に醸成させる。

(ちんちんが大きくなりすぎて、痛くなってきた)

更に悪いことに、恋愛も肉欲も自覚していない直海だが、その未成熟な身体の内には牡の本能が年相応な発育を遂げていた。ブリーフを押し上げた童貞のペニスチャックに押しつけられ、制服のショートパンツがますます隆起する。

(こんなの雪お姉ちゃんに知られたりしたら……絶対に嫌われちゃう)

勃起を覚られまいと、直海は恐る恐る腰を引いた。そんな少年の努力を嘲笑うように、若き男の象徴は益々股間へと邪な血を流し込んでいく。

「あら、雪ちゃんに直ちゃん」

いよいよ両の掌で盛り上がる股間に蓋をしようとした矢先、穏やかな声が窮地に割り込む。俯いていた直海が顔をあげ、雪音が声の主を求めて振り返ると、優美な顔立ちをした美女が柔和に微笑んでいた。

「透子さん。おはよう」

「はい、おはようございます」

雪音がフランクに挨拶をすると、優しげな美女——小野原透子は、ゆつたりとした

動きで、丁寧に頭を下げる。

「直ちゃんも、おはようございます」

「お、おはよう。透子お姉ちゃん」

雪音より更に年下の直海に対しても、透子の態度に変化はない。懇切丁寧な言葉遣いで、深々とお辞儀をしてくれる。

（透子お姉ちゃん、今日もとっても綺麗）

慌ただしく頭を垂れた直海は、六年前に三石家の右隣に越してきた美女を見つめる。ユーメラニンの希薄な雪音とは異なり、艶に溢れたふんわりとした長い黒髪。

生まれてから一度も怒ったことがなさそうな柔和な双眸に、悪口とは無縁のたおやかな声を紡ぐ美唇。性格は見た目以上に優しく、いつも微笑みを絶やさない。

（それに…透子お姉ちゃんって、メチャクチャおっぱいが大きい）

緩やかな美女の双眸に合わせていた視軸を、こっそり降ろしていく。容姿も性格も穏やかな透子だが、胸の膨らみだけは苛烈なほど自己主張が激しい。雪音もそれなりに豊かなバストの持ち主だが、透子は更に一回りは大きく、それこそ見るだけで目が覚めるほどのサイズだ。

（たぶんたぶんって、おっぱいが弾んでる）

タイトル

あまりにも豊満なため、雪音と違って透子の乳房は直接触れなくてもダイナミックに揺れ動く。歩く、会釈をするといった些細な動作ですら、薄桃色のスプリングセーターを悩ましく伸縮させる。

一時的に停止していたペニスの膨張が復活する兆しを察知し、直海は名残惜しさを感じつつも透子の巨乳から視線を外した。

「透子さん、仕事帰り？」

「はい。夜勤明けなので、ちよつと眠くてふらふらしています」

どちらかといえば、ふらふらというよりはふわふわとした声調で透子が答える。

雪音より六つ年上の透子は齋美市立病院に勤務する看護師だ。いつもは日勤だが、月に数回程度夜勤が入るので、こうして登校する直海とは時折行き違いとなった。

三石家の隣に住んでいるのもさることながら、ついこの間まで雪音が通っていた慶徳女子高等学院のOGであることもあってか、二人の仲は極めて親密である。

「それじゃ、私はそろそろ失礼しますね。二人とも、いつてらっしゃい」

しばらく雪音と歓談していた透子だが、やがて会話を切り上げ、ふわりと頭を垂らし優雅に遠ざかっていく。ゆっくりとした歩みに同調し、透子の豊乳が柔らかな波を打つ様に、直海の視線が自然と吸い寄せられた。

「ふふ、直君ったら透子さんのおっぱいばかり凝視しちゃって。やっぱり男の子はみんなおっぱいが大好きなんだ」

透子の姿が完全に真後ろとなり、蹶音すら聞こえなくなったところで、直海の耳朶を湿った囁きが撫でる。いつの間にか雪音が背後に忍び寄っており、直海は「ひやうっ」と飛び上がらんばかりに驚いた。

「そ、そんな違——ぼ、ぼく、おっぱいなんて」

己の悪行が露呈していたと知らされ、血が逆流せんばかりの焦りが未熟な身体を苛む。高揚と至福に満たされていた熱い鼓動が、形容しがたい悪寒に侵蝕されていく。

(どうしよう……透子お姉ちゃんのおっぱい見ていたって気付かれたら……)

大好きな雪音から嫌われてしまうかもしれない——そんな怖ろしい想像が、勃起していたペニスを急速に萎ませていった。

「もう、隠さなくたっていいじゃない。直君くらいの男の子が女の子に興味を持ち始めるのは自然なことだよ？ 大人になってきている証拠なんだから」

「そう、なの……？」

女の身体に興味を持つことが大人に近付いている証拠であるなど、初めて聞く。日夜、早く大人になりたいと願っていた直海だけに、雪音の見解には一驚してしまう。

タイトル

「うん、そうなの。ただ、さっきみたいにあんまりジロジロ見ちゃダメよ。見るならチョットだけ。今回のことは、透子さんにも黙っていてあげる」

「あ、ありがとう。雪お姉ちゃん」

幼馴染みの恩赦に、直海は心の底から感謝する。透子に己の愚行が伝わる心配がなくなったこと。何より、雪音から嫌われなかったことが、幼く純粹な恋心を抱く少年から恐慌を消し去っていった。

「ところで……直君は、私の身体も見てみたい？」

「えっ——そ、それは……」

深い安堵を覚えた隙を狙うように、雪音が突拍子もない問いを投げかけてくる。

(どうしよう。ちよつと見るくらいなら許してくれるみたいだけれど)

雪音の言質を取るならば、正直に白状しても怒られることはないだろう。しかし、許してくれても嫌いにならないかどうかは、また別の話のはずだ。

(でも、雪お姉ちゃんには全然興味無いとは言えないし……)

幼馴染みに抱いている本心は打ち明けられないが、かといって嘘を吐くのははばかれる。何より、恋心と相反する答えを軽々と口にできるほど、直海はしたたかに育つてはいなかった。

「やっぱり。二人とも、まだこんなところにいたの？」

直海が答えに窮していると、三石家の門から妙齡の美女が姿を現す。意地の悪そうな笑顔を浮かべていた雪音は瞬間に貌を変え、優雅に背後へと振り返る。

「どうしたのお母さん。車庫じゃなくて門から出てくるなんて」

「大学に向かっていているはずだった娘が、何故かまだ家の前でおしゃべりしているんですもの。気になるに決まっていますよ」

雪音の母たる美熟女——三石遙奈は、娘である美少女を微かに睥睨してから「ふう」と何かを諦念したのか小さな溜息を吐く。もともと、そんな表情はすぐさま伶俐な美貌へとすり替わり「直海君、おはよう」と、凜とした美声を紡ぎ出す。

「お、おはようっ。おばさん」

遙奈の持つ氣勢に倣い、直海も腹に力を入れ挨拶をすると「よろしい」と、遙奈は頬を綻ばせた。

（おばさんって、何時見ても凜々しい）

雪音の母だけあって、遙奈は犀利な瞳とシニヨンに纏めた黒髪が美しい熟女だ。

奇しくも母である秋子と同年齢の三十六歳だが、子を持つ女として放たれる印象はまるで違う。その最たるものが、颯爽と着こなされた瀟洒なタイトスーツだろう。

タイトル

専業主婦として家庭を護っている秋子と異なり、遙奈は自らが創立した輸入代行会社の社長をしている。

しかも、若くして伴侶を亡くしているため、実質一人で三石家を切り盛りしていた。（ママがおばさんのことを凄いつて言っていたけれど、なんとなくわかる）

女が一人で会社を立ち上げ、未亡人として娘をきちんと養い、裕福な暮らしができるだけの収入を稼ぎ出すのがどれだけ大変か、幼い直海にはまるでわからない。

それでも、毅然とした立ち振る舞いや、人を従えることに馴れたよく通る声を聞いていれば、カリスマとも言える雰囲気を感じ取られた。

「ところで直海君。このままだと遅刻するんじゃないかしら」

「えっ——うわっ」

遙奈はスーツのポケットからスマートフォンを取り出すと、警告しながらモニタを見せる。そこに表示されていた時刻を見た途端、直海の瞳が見開かれた。

「ど、どうしよう……ぼく、今日は日直なのに……」

直海としてはほんの少しだけ雪音や透子と話しているつもりだったが、楽しい時間は容赦なく時計の針を進めていたらしく、これでは学校の正門が閉まってしまふ。

しかも日直なので、遅刻したら印象の悪さには拍車がかかる。

「ふう……仕方ないわね。私もちょうど会社に行くところだし、特別に車で学校近くまで送ってあげる」

「ほ、本当に？」

「ただし、今回だけよ？ 次は遅れたら駄目だからね。わかった？」

思わぬ形で伸ばされた救いの手に、直海は大きく頷いて首肯の意を表す。隣家の少年が猛省しているとわかったのだらう。硬質な声で窘めていた美熟女の紅い唇が、「良い子ね」と、ようやく柔らかかにほぐれた。

「良かったね、直君。学校に遅刻せずに済んで」

「全然良くないわよ、雪音。大学生の貴女が直君を遅刻させるような真似して。門の隙間からチラッと見えたけれど、さっきまで透子ちゃんとも話していたでしょう」

露骨に目を泳がす雪音を尻目に、遙奈はヒールを甲高く鳴らしつつ、掌に収まっていたリモコンを操作する。電子音が認証を知らせ、煉瓦塀をくり貫くように設えられた車庫がシャッターを迫り上げていく。

「直海君、今年は中学校の受験なんだし、進学の評価が響いたら秋子さんに誰が申し開きをするの。罰として、貴女が車の運転をしなさい」

「ちよっと待ってよ。私、春休みに免許取ったばかりだって知ってるでしょう。マ

タイトル

ジエスタなんて、怖くて運転したくない」

大学入学祝いとして、見た目が可愛いという理由だけでフィアットのエントリーモデルを母親から買ってもらった娘は、苦虫を噛み潰したように端麗な眉根を顰める。

「心配しなくても大丈夫よ。もし、傷でもつけたらお小遣いから天引きするから」

娘が如何なる抗弁を挟もうとも、聞く耳を持つ気はないのだらう。遙奈は早く車庫に入れとばかりに、無言で車のキーを掲げた。

「ああ……直君。お姉ちゃん、今年はもう一緒にゲームできないかも」

悲壮の滲み出た微笑みを顔面に張り付かせ、鍵を押しつけられた雪音が幽鬼を彷彿とさせる足取りでシャッターの開放された車庫へと吸い込まれていった。

「まったく……ごめんね、直海君。雪音がすぐ一緒に登校してくれれば、こんなことにならなかつたのに」

「う、ううん。その、雪音お姉ちゃんだけが悪いわけじゃないし」

時間の確認を忘れていたのは、直海の純然たる失態だ。一秒でも長く雪音と一緒に居たいという願望があったからこそ、登校の最中であることすら忘れてしまっていた。一緒に登校して貰っているのが、直海にとっては最高の贅沢に等しい。デートも知らない幼い少年にとって、恋い焦がれた年上の美少女と途中の通学路まで一緒に過ご

せるのは、この上ない幸せだった。

「あの、おばさん。もし、雪お姉ちゃんが車傷つけちゃったら、ぼくも弁償する」
娘より更に年下の少年が、いきなり保証を持ちかけてきたので驚いたのだろう。遙奈は切れ長の双眸を瞬かせて、背丈の低い少年を見下ろす。

「その…：ゆ、雪お姉ちゃんと一緒にゲームできないと、つまんないから…：」

車の修繕費がゲームソフトの何倍、下手すれば何十倍もかかることすら知らない直海は、雪音が悲しむ顔を見たくない一心で拙くも真摯に遙奈へと申し出る。

その純真さが滑稽だったのか。あるいは常識知らずの提案が失笑を買ったのか。遙奈はおもむろに嘖き出すと、笑声の漏れる紅唇を指で隠した。

「あ、あれ？ おばさん、何がおもしろいの」

「ううん、何でも無いわ。ただ、直海君は本当に良い子だなんて、思っただけ。秋子さんと健吾さんが溺愛するわけね」

「あっ…：う、ん」

未亡人となつてもプラチナのリングが残る織指が、ふわりと直海の頭に乗せられ優しく撫でてくる。雪音の母だけあって、好意の表現は瓜二つだ。

（ああ、おばさんからも、すっごく好い匂いがする）

タイトル

スーツの中から溢れ出る美熟女の香りが、直海の鼻孔を甘く蕩かす。十八歳の美少女のものとはまた異なる、ねっとりとした柔らかに爛熟した果実を彷彿とさせる、大人の女の芳香。

遙奈の愛用する高級なフレグランスと、三十六歳の女体が放つ妖しい匂いが、直海の脳裏に甘い靄を沸き立たせた。

「ん…：そろそろ、雪音が出てくるわね」

車庫からエンジン音が轟くと、遙奈は直海を撫でていた手をすりと降ろし、ヒールを鳴らせて背後へと振り返る。

（むちむちした脚が目の前に…：）

遙奈自身は何ら意図していない行為だったのであるが、直海にとって目の前に突き出された生々しい光景は、あまりにも煽情的なインパクトを帯びていた。

熟れた女脂がたつぷり湛えられ、ストッキングによって艶然と輝くふともも。それだけでも直海の無意識に潜んだ本能を擽るが、強烈なのは媚脚を支える熟尻だ。

（おばさんのおっきなお尻…：目が離せない）

タイトなスカートへ窮屈に押し込まれた美熟女の臀肉は、スーツの布地に皺一つ刻ませる余裕を与えることなく、パンパンに張り詰めさせている。

十八歳の女子大生や、二十四歳のナースとは爛熟の深みが異なる、三十六歳の艶やかな脂がのった牝臀。経産婦だからこそ成り得る妖艶な媚尻が手を伸ばせば届く位置にあった。

(このお尻を触って見たい……思いつきり、ギョツて揉んでみたい)

美熟女が無自覚に撒き散らしたフェロモンが、直海の自制心を蝕む。一時は落ち着いた股間がまたしても邪な熱を持ち、股間を疼かせる。

カツンと遙奈がヒールを鳴らした。僅かに片脚が位置を変え、ふとももの変化に応じてタイトスカートに覆われた臀溪が深みを増し、匂い立つほど妖しげに女社長の牝尻がむっちりと揺れる。

「直君、おまたせえ」

のろのろと車庫から這い出てきたマジエスタから雪音が手を振る。思い人の声が直海の双眸から獣欲を引き戻したのと、遙奈が肩越しに振り返ったのはほぼ同時だった。

「さあ、直海君。乗って頂戴」

促されるままに、遙奈の開けてくれた後部ドアへと直海はおずおずと身体を入れる。静かにドアが閉められ、遙奈も遅れて助手席へと乗り込んだ。

(はあ……ぼく、やっぱりおかしいのかな。どうしてみんなの身体にこんなドキドキ

タイトル

しちやうんだろう)

雪音の美脚が、透子の巨乳が、遙奈の媚臀が、焼き付けられた脳裏から薄れることなく、幾度と無く色鮮やかなリフレインを繰り返す。

幼い故に純粹な恋慕と精強な獣性を同居させたまま、無意識に発情した少年を乗せた車がゆっくりと動き出した。

二章 お姉ちゃんはシヨタ君の童貞を食べちゃいたい

尽きることのない細い陰雨が、空を鈍色に燻していた。春の陽気はとうに西の果へと消え、東からは日に日に夏の兆しが近付いている。宙は雨に煙り、路面は冷たく濡れているのに、湿気た大気はじつとりとした熱を孕んでいた。

それは何も、三石家の邸宅においても例外ではない。定期的に訪れるプロの家政婦が完璧な清掃を施していても、生温かな空気までは取り除けない。応接間に敷かれた畳はしつとりと冷たくなり、濡れた傘が立てられた広い玄関には、滴り落ちた雨粒がぼたりぼたりと石畳に水溜まりを作る。

「それじゃ、直君。制限時間は三十分ね。頑張って」

タイトル

そんな屋内にあつて、雪音の個室は極めて快適だ。梅雨入りと同時に主から二十四

時間稼働を命じられたエアコンはこの日も除湿に勤しみ、厳密に定められた不快指数^ルを達成している。エコロジーや節電など眼中にない社長令嬢は、さらりとセミロングの髪を流し、清潔なダブルベッドをソファで代わりにしてタブレットで電子書籍を読み始める。

小さいながらも小洒落たウッドテーブルに算数の問題集を広げていた直海は「うん」と頷き、小さな指で鉛筆を握った。

(まさか、雪お姉ちゃんと一緒の時間が増えるなんて)

憧れの美少女と同室する幸運を噛み締めながら、意気揚々と設問を解いていく。

今年、直海は中学受験だ。もともと、成績優秀な少年は、受験戦争に忙殺されてしまうほど、勉強に明け暮れる必要はない。それでも、一人息子に万が一があつてはならないと、母親である秋子は一年間の入塾を進めたが、直海はこれに渋った。

(塾なんて行っていたら、雪お姉ちゃんと会える時間が殆どなくなっちゃうよ)

普段は素直に言うことへ従うだけに、頑なに抵抗する息子に秋子は大層困惑したらしい。そこで考えた末、塾の代わりに雪音に家庭教師をお願いしたところ、駄目元だったにもかかわらず年上の幼馴染みは快諾してくれた。受験期間を終え、一次志望だった有名大学にストレートで合格した才女が、マンツーマンの家庭教師をしてくれる

のである。母親たる秋子としては、願ったり叶ったりだった。

無論、この僥倖に直海が異を唱えるはずもない。かくして、受験勉強という大義名分を得て、直海は雪音と二人きりになっていた。

(雪お姉ちゃんに見られるんだもん。格好悪いところは、見せられない)

もとより勉強熱心な直海だが、添削してくれる相手が雪音なのだから気合いの入りようが違う。自分の良いところを見せつける、絶好の機会に奮起しないはずがなかった。

(たくさん正解したら、雪お姉ちゃんはいっぱい褒めてくれるかな)

恋愛の衝動はあっても恋愛を知らない少年にとつて、好意を持つ相手から褒められるのは最大の褒美だ。無垢すぎる想いはそれだけに凄まじい集中力を発揮させ、直海は脇目も振らずに解答を書き終える。雪音のパソコンから流れるゆったりとしたリラクゼーションミュージックの効果もあつてか、検算しても十五分すら経過していない。(もう一回見直そうかな。あ、でも早く終わつた方が喜んでくれるかも)

どちらがより良い印象をもつて貰えるだろうか――と、脳裏で天秤にかけながら、直海はちらりと雪音の様子を窺う。

(うーっわっ)

タイトル

問題用紙に釘付けになつていた瞳が、猛烈な勢いで焦点を変更する。直海の気付かぬうちに、より楽な姿勢を求めたのだろう。ベッドに腰掛けていた雪音はいつの間にかマットレスに身を投げ出し、腹這いとなつてタブレットを操作していた。

(雪お姉ちゃんのキラキラした脚が……)

プリーツの刻まれた黒いミニスカートから、雪音の美脚が惜しげも無く伸ばされている。ハニーベージュのパンティストッキングに彩られた女子大生の脚肌が、輝糸に透けて美しく煌めいた。靴やスリッパに隠されてなかなか見る機会に恵まれないほっそりとした足指までもが、あますことなくさらけ出されている。ナイロンの光沢に包まれた爪先がもそりと蠢き、直海は慌ててノートに視線を落とした。

(ジロジロ見ちゃいけない。こんなこと知られたら嫌われちゃう)

春先に、女体を見たいのは仕方ないが節度を持つようと、雪音本人から直に言い含められているのだ。雪音に見咎められないからと、卑怯な真似をして覗き見るなど論外だろう。

(うう……でも、やっぱり見ていたい……見たくて堪らないよ)

直海の理性が道徳を訴える一方で、綺麗事を抜かすなとばかりに猥雑な窃視衝動が心の奥底から迫り上がってくる。純粹無垢な反面、牡の身体に灯された成長期に伴う

激しい性欲が、直海の自制心を侵蝕した。

(なんで雪お姉ちゃんの脚って、こんなにドキドキするんだろう)

同級生の女子の脚など見ても何とも思わないのに、女子大生の成熟した脚には異様なまでの興奮を覚えてしまう。むっちりとしたふともも。しなやかなふくらはぎ。優雅にくびれた足首——そのどれもが、直海の瞳を不可視の力で吸い付ける。

そうした魅惑の脚線を彩るハニーベージュのパンティストッキングが、直海の内にも芽吹いた獣性を誘惑していた。

「ねえ、直君。もう残り時間半分くらいだけれど、調子はどう？」

タブレットから手を離すことなく突然雪音が喋り始めたので、直海は大慌てで視線をノートへと落とした。

「だ、大丈夫だよ。えっと……み、見直しするところ」

もうすべて終わった——そう言いかけた直海だが、咄嗟に嘘が口を突いて出る。雪音に虚偽の報告をしてしまう後ろめたさが滑舌を悪くさせた。

女子大生の美脚を、瞼に焼け付かせるまで見ていたいという沸々と湧き出る欲望が、制限いっぱいまで背徳の時間を愉しめるよう、未熟な舌根を操った。

「ふふ、直君は頭良いね。後半も頑張るんだぞー」

タイトル

緊張と周章に苛まれる最中、ベッドに寝転んだ女子大生は間延びした応援を寄越してくる。己の悪行が露呈していなかったとわかり、雪音に見咎められぬよう直海は細く静かに安堵の溜息を吐いた。

(うう……ごめんなさい、雪お姉ちゃん。ぼく、とつてもいけないことしてる)

決して詳らかにできない罪を胸中で告白し、答えのない許しを請う。良心と乖離した欲望は、再び蒼炎を秘めた瞳で無防備過ぎる十八歳を熱く見つめる。

しかし、そんな背徳の行状が密やかに観察されているなど、直海は知る由もなかった。

除湿済みの冷たい空気がエアコンから微かな低音を乗せて押し出され、栗色に艶めくセミロングの髪を僅かにそよがせる。

脱力した激励を飛ばした雪音はタブレットの操作に没頭すべく、モニタに指を滑らせた。もつとも、それは展開している電子書籍のページを捲るためではない。擬装のために選んだファイルは、字はおるかタイトルすら祿に確認しておらず、ただ一定間隔でページを送っているだけだ。

美少女の繊指がモニタを滑ると、画面の左下に映し出されていたメディアプレイヤの映像が変化する。連動して、室内のラックに並べられたインテリアに混ざるネットワークカメラが、レンズの倍率を拡大した。

(ふふ、直君…：また熱心に私の脚を見始めた)

小型ながらも高性能な光学機器が、少年の横顔を斜め上から映し出す。検算するといった少年はノートに鉛筆の先端を乗せたまま、一問たりとも見直す素振りを見せない。代わりに、ぴくりとも首を動かさず、食い入るようにしてハニーベージュに輝く女子大生の脚に見入っている。

(直君の大好きな雪お姉ちゃんが、こんな無防備な姿を晒しているんだもの。勉強なんて手に付かなくなつて当たり前だよ)

憧れの女が至近距離、かつ無防備な姿で、見咎められる不安も無く肢体を披露してあげているのだ。年相応の性欲を持て余している少年が、欲望に突き動かされない道理はない。

真正面から撮られた画ではないので、さすがに表情の細かさまではわからないが、それでも直海が目を皿のようにして雪音の下半身を見つめているのは明白だ。

少年の蒼い熱の籠もった視線に炙られ、色めいた火照りに身体が感化されるのを覚

タイトル

えながら、雪音はねつとりと粘りを増した涎を湛え、愛欲に塗れた吐息を零した。

(ほら、もつとじっくり見ていいんだよ。私の身体は、ずっと前から直君に捧げられて決めているんだもの)

直海に対して異常なまでの愛情を抱いていると気付いたのは、雪音が中学校に進学して間も無い頃だ。当時、同性の友人らと恋愛話を交えているうちに、自分が同年代の女子とは男子の魅力に対する捉え方が、決定的にずれていると気付いた。

(クラスで人気の男子とか、格好良い俳優とかタイプの芸能人とか、何一つ興味をそそられなかった)

代わりに脳裏に浮かぶのは、雪音を姉代わりに慕ってくれる隣家の愛らしい少年だ。無論、幼い子を可愛いと感じるのは誰もが抱く普遍的な感情だろうが、雪音の好意はそれとは一線を画していた。直海の服を剥ぎ、幼い身体を弄り、一生自分のモノとしたいという、道徳に背く衝動が子宮を揺り動かしていた。

もつとも、社会通念のズレ程度で苦悩する雪音ではない。同年代の女生徒と比べ、格段に早く自己が確立されていた雪音は、異端と評しても過言でも無いマイノリティな性癖を全肯定した。

(隠すのは面倒だったけれど、みんな容易く騙されてくれた)

直海への愛を自覚すると同時に、この偏執な愛が世間では受け入れられないともわかっていた。そのため、同級生達の間ではまったく興味のないミーハーな恋愛観を語り、周囲に気取られることを慎重に避けた。

驚塚家の大人達には「直海と親しくしてくれる女の子」を演じ、若い少年への病的な執着を気取られないよう、愛嬌の奥底に本性を慎重に紛れさせた。

（難しいのは、直君から女として欲情して貰うことだった）

ただ、好意を抱かれるだけならば難しくない。人の心を餌付けするやり方は、学校生活を経て実証している。

厄介なのは仲が良すぎて、直海が異性として雪音と見るのではなく、家族と等しい親愛を抱いてしまう事態を回避することだった。

（今から思えば、本当に我慢して、努力したと思う）

四六時中直海と一緒に居たい想いを抑え、わざと会える時間を減らした。何時でも気軽に会える女ではなく、直海が強く会いたいと望み、働きかけなくてはならない女であると密かに教え込んだ。

タイトル

その一方で、直海の前では女の身体の魅力を暗に見せつけた。直海と会う時は必ずミニスカートを穿き、不自然にならない程度に女の美脚を見せ付ける。二の腕を当て

ることで胸の膨らみを殊更に強調し、優れた女体であると披露した。

香水は何度も種類を変え、直海からそれとなく感想を聞き出して、最も好むものを吹きつける。そして、時折悪ふざけを演じて少年にスキシップし、柔らかな耳朶に己の甘い声を撫で付けた。

視角・聴覚・嗅覚・触覚と、利用出来る感覚はすべて利用し、雪音は静かに幼い身体を誘惑し続けた。

（根気よく続けた甲斐あって、ようやく直君は私に欲情してくれるようになった）

直海自身は、雪音が女の身体を使って魅了していたと気付いていないだろう。しかし、直海の奥底に潜む牡の本能は、身体の成育と共に美少女の放った姦計に囚われ、淫らな畏に餌付けられていった。

（直君のおちんぼが勃起しているって気付いた時、嬉しさと興奮で眠れなかった）

何年もの時間をかけて、愛しい少年の獣欲を丹念に育ててきたのだ。その間、幾度直海を淫辱する妄想に耽っただろう。幼馴染みへの狂おしい衝動を寸前で自制心が宥め、短絡的な逆レイプの衝動を抑え込んだ回数に教え切れない。

直海の身も心も手に入れる計画にケチが付かないよう、細心の注意を払って結ばれる機会を窺った。

(直君と長い時間、二人きりになれるチャンスが巡ってくるなんて)

そんな折りに、降って湧いた家庭教師の依頼は、まさに渡りに船だった。しかも、個人授業の時間帯は遙奈はほぼ外出しているため、実質この家は雪音が支配している。外から邪魔が入る心配もなく、中の事情が外に漏れる心配もない。

二度と来ないであろう絶好のシチュエーションは、雪音が長年秘め続けてきた夢の成就を決意させた。

(後少しだよ。今日こそ、私と直君が結ばれるんだからね)

愛欲に駆られて手込めにするのではなく、相思相愛でセックスをするのが、雪音の理想だ。そのためにも、直海が本能の赴くまま雪音に襲いかかろうとするくらいまで、色欲を煽動しなくてはならない。

(これだけで満足しちゃダメだよ。ほら、お姉ちゃんがもつと奥まで見せてあげる)

直海の肉体に抑え込まれた若い獣欲を解き放つべく、雪音は優れた肢体を艶美にさらけ出していく。俯せにしていた身体を横に直し、猫が寝そべるように膝を小さく引く。反動で女子大生の美尻がむつちりと強調された。

ミニスカートの被せられていた十八歳の美脚がより過激に露出し、ふとももの生え際を示すランガードまで見せつける。

タイトル

(直君、そんなにお姉ちゃんの脚が好きなんだね……ああ、可愛い)

見る機会のないパンティストッキングの深部まで現れたためだろう。タブレットに映る少年は雪音の身動きに釣られて小動物の如く肩を震わすも、直後に晒された淫らな絶景に身を乗り出す。

もつとも、勉強を見て貰っている最中という制約は破れないらしく、立ち上がることはない。クッションに座したまま、テーブルに掌を突いて上体を前のめりにして、雪音の痴態を目に焼きつけようとしていた。

その女慣れしていない如何にも逼迫した様を、雪音は陶然と眺める。

(もつと、私の脚を視線で舐め回して……直君のエッチな瞳を肌にはき付けて)

女子大生の脚肌は淫熱を帯びた少年の視線を敏感に感じ取る。ふくらはぎが甘い痒みを帯び、膝裏がこそばゆい熱に疼いた。感触は無いはずなのに、ふとももは直海の双眸で舐められているように、ぞくぞくとした悦美がハニーページュに彩られた脚肌を蕩かす。

室内で直海が好き放題に雪音の脚線を眺められるのと同じく、雪音もまた如何なる干渉も排除され、遠慮の欠片もなく直海に見つめられる悦びに浸った。

(ああ、直君に見られているだけで感じて来ちゃう)

少年から発せられる劣情の熱気が、次第に女子大生の肢体を感化させていく。脚肌を視淫される悦びが血に溶け込み、全身へと飛び火する。

ブラに包まれたきめ細かな乳肌に淡い痺れがまぶされ、まだ一度たりとも異性に触れさせていない乙女の乳首が甘く疼いた。ささやかに隆起した桜色の突起がカップに擦れる感触が切なく、迫り上がってきた甘い濡れ声を喉の奥へと落とす。

(直君が焦れてるのがわかる……ふふ、見たいよね。お姉ちゃんのショーツ、男の子だったら見たくて堪らないよね)

中学生の時はクラスでも筆頭の美少女だった雪音に、性欲を持って余した男子達の視線が注がれていた。特に、階段を昇降する際にはスカートを少しでも奥へと覗こうとする視線が下から突き刺さってきたものだ。

まだ幼い直海だが、雪音に恋煩いしていることもあり、スカートの奥を凝視する熱量たるやパンティストッキングが発火するのではないかと憂慮するほどだ。

(本当は見せてあげたいけど、まだダメ。たっぷり焦らして、イジワルしてあげる) 普段からミニスカートを愛用しているだけに、ショーツを覗けない瀬戸際のラインは心得ている。ふとももの大半が露出し、ランガードまで見えてしまっているが、それでも丈が短く頼りないスカートは鉄壁を誇っている。

タイトル

その境界が判別できないのだろう。直海は何とくしてショーツを覗き見ようと、幾度と無く首を捻り、上体を伸ばす。その一途な必死さと純粹さが、雪音に幼げな愛らしさと求められる悦びを与えてくれる。

(ダメだよ直君……そんなに見つめられたら、お姉ちゃんおまんこが疼いて、オナニししたくなっちゃう)

直海のひたむきな愛欲と黒く焦げ付く獣欲が、女子大生の股座を疼かせる。中学生の頃から直海のペニスを求めていた秘裂は、処女膜の隙間を縫って湯気の立たせた淫蜜を滲ませる。柔らかに窄まる牝口からはしたない涎が溢れ、じわりとクロッチへと染みこむのが感じ取れた。

身体に籠もった淫らな熱が喉を焼き付かせる。気を緩めればショーツの中に這い入ろうとする己の指をベッドシートに挟り込ませ、雪音は己の衝動を抑え込む。

(直君、苦しいでしょ。ショーツ見たくてもどうしても見えなくて、スカートが憎くて堪らないよね)

雪音の美脚を損なうことなく存分に魅せてくれるミニスカートも、今日だけは恨み言を唱えずにいられないだろう。牡を魅了して止まない女の股座を、吹けば飛ぶひらひらとした布地が隠しているのだから、余計に苛立たしさを募らせるのは明らかだ。

（我慢するんだよ。そうすれば、後でショーツが見えるなんてどうでも良くなるくらい素敵な体験ができるんだから）

端から見れば失笑を幼い浅ましい覗き行為だが、その我武者羅さともどかしげな様子が雪音にサディスティックな恍惚を湧き上がらせる。あの可愛らしい直海が、こんな見苦しい真似を晒してまで姉貴分である少女の身体を求めてくれるのが感無量に尽きた。

（さあ、もう時間だよ。これから、男と女のお勉強をたつぷり教えてあげる）

制限時間の三十分が経とうとしていた。直海を籠絡していく期待と昂ぶりが、色欲に混じって美少女の肌理をざわめかせた。

「さあて、タイムアップ。ちゃんと出来たかな」

いきなり身動きするのではなく、故意に一声挙げ、凝ってもいないのに四肢を伸ばす。我に返った直海がタブレットの中で慌てふためき、雪音は笑声を漏らさないようにするのが必死だった。カメラをスリープさせ、見せびらかすようにすりとした美脚を高く跳ねさせてから、ゆうゆうとベッドを降りる。

「それじゃ、答え合わせするよ。間違っている箇所があったら一緒に原因を探して、直していくからね」

タイトル

「う、うん。わかった」

雪音の指針に頷く直海だが、その顔は茹でダコを彷彿とさせる赤に染まっている。隠れて覗きをしていたという疚しさがあるらしく、羞恥に顔を覆っていた少年はちらりと雪音を見つめるも、視線が合わさると慌ててそっぽを向いてしまう。嘘を吐ききれないまっすぐな少年が可愛らしく、雪音は抱きつきたい衝動を堪えるのに難儀した。

（おちんぼが勃起しちゃって困ってるのね。もう、そんなことしていたら余計にイジワルしたくなっちゃうじゃない）

体型にびったりと合ったショートパンツでは、膨張した男根を上手く収められないらしく、正座した直海は居心地が悪そうに下半身をもそもそと揺らす。

無論、そんな状況を雪音が見逃すはずがない。

「えっ——ゆ、雪お姉ちゃん？」

直海にしてみれば、今ほもつとも雪音に近付いて欲しくないだろう。ペニスが厚顔にも隆起しているわけだし、察知されれば恥ずかしさは頂点に達する。

それがわかっているからこそ、直海をより狼狽させるべく雪音はテーブルの対面ではなく、あえて隣に座った。可能な限り雪音から距離を取りたかったのか、左隣に座

った雪音から逃れるべく、直海は上半身を右傾させる。

「こおら、直君。姿勢が悪いよ。ほら、背筋をピツと伸ばしなさい」

「うう……ご、ごめんなさい」

稚拙な逃走を赦されず、直海はおずおずと姿勢を正す。雪音は肩を隣接させ、より少年の動悸を煽り立てた。

（お姉ちゃんが、もつとおちんぼ苦しくしてあげる）

すぐそこに夏が迫っていることもあり、直海のショートパンツは涼しげなものだ。それだけに布地は薄く、邪な体積の増加が顕著に反映されていた。未成熟な少年の牡が反応したという確かな証拠を目の前にして、雪音の淫らなテンションが俄然上がった。

「それじゃ、答え合わせをしちゃうね」

「う、うん……っ」

直海と肩を並べたまま、雪音はすらすらと答案に正否を記していく。ただし、ノートを自分の眼下に引き寄せることなく、直海の前に置いたまま赤ペンをすべらす。

肩だけではなく二の腕が触れ合い、一驚した直海が声をあげる代わりにうなじを立てる。少年の初心すぎる様が、甘い至福を女子大生の胸に響かせる。

タイトル

「正解……正解……うん、今のところ全問正解だね。直君、やっぱり頭良いんだね」

「う、ううん……そんなことない、よ」

採点を半分程度終えたところで、くるりと少年へと双眸を向ける。憧れの美少女に褒められたのもさることながら、至近距離から見つめられたのがよほど気恥ずかしかったらしく、直海は瞳孔を右往左往させた。

（目を逸らしたって、無駄なんだから）

発情の励起から逃れようとする少年の耳朶に、女子大生は桜唇から細く流した呼気を妖しく吹きかける。思わず声が出そうになったのだろう。直海は唇を強く引き結び、喉から迫り上がってきた幼い喘ぎを押し殺した。

そうした儂い努力を嘲笑うように、雪音はセミロングの栗毛を手櫛で梳く。直海好みのコンデイショナーの香りがふわりと巻きつかせると、幼い鼻梁がびくりと蠢いた。視線は幾らでも外せるが、呼吸を何時までも止めておくことはできない。劣情を馬食し膨満するペニスを抑え付けるべく、雪音に見咎められないよう直海はそろそろと股間に掌を被せた。

（いっぱい我慢するんだよ。その分、後でとっても気持ち良くなれるんだから）

直海の不自然な行動は一切咎めず、見て見ぬ振りをして答え合わせを続けていく。

その間、女子大生の甘い悪戯は継続され、触れ合った腕をやさしく擦り合わせ、一問にかける添削をじっくりと遅滞させた。

「うん、全問正解。さっすが直君。ちゃんと勉強しているんだね」

「う、うん。今年は受験だもん。去年よりちよつと多く勉強してるから」

雪音を前にして見事満点を取ったからだろう。女の色気に当てられながらも、直海の声は誇らしげな張りに満ちていた。

「そうなんだ。難しな―とか、判りにくかったな―って問題も無かった？」

「うん。そんなの一つもないよ。どれも簡単にわかったもん」

直海の弁に虚勢が混じっていないのは、監視映像を見ていた雪音は当然理解している。もつとも、頬を赤らめた少年の声が普段よりずっと弾んでいるのは、ひとえに良いところを見せたいという、ささやかな承認欲求の現れなのだろう。

そんな幼い少年の自慢顔が、雪音の嗜虐心を妖しくそそらせた。

「ふうん……それじゃあ――」

赤ペンをテーブルに転がし、机に頬杖をついてからにこりと直海に微笑む。

「さっきスカートを覗いていたけれど、私のランジェリーが何色かわかった？」

声のトーンは変えることなく、さながら世間話をする調子で直海に語りかける。一

タイトル

方、雪音に褒められ、込み上げてくる喜びを噛み締めていた少年の顔から、一瞬で表情が消え去る。幼い肌を朱く染めていた恥じらいは、恐慌の青へと染め直されていく。「ど、どうして……そんな……」

「タブレットに直君がちよつとだけ反射して映り込んでいたの。気付かなかった？」

雪音の使っているタブレットはノンングレアタイプだ。当然、使用者の顔すら見えないのだが、そんな嘘を疑う余裕は直海にはない。もとより、蠱惑を宿した雪音の下半身に視線が集中していたのだから、タブレットなど眼中に無かったのだろう。

「女の子の身体に興味を持つのは仕方ないにしても、スカートの中を覗こうとするのはダメだよ。直君だって、わかってるよね？」

小学校低学年ならばまだしも、高学年ともなればいたずらっ子がスカート捲りなどしようものなら、同級生の女子から袋叩きになるとは知っているだろう。

案の定、幾ら性に無知であろうとも、ショーツを見るのは厳禁だとわかっているらしい。直海は肩を震わせ「ごめんなさい」と消え入りそうな声で呟いた。

（直君ったら……怯えた顔もこんな可愛いなんて反則よ）

幸福から一転、絶望の淵に立たされた少年は、瑞々しい唇を怯懦にぷるぷると震わせている。いつ滄沱に転じてもおかしくないので潤んだ双眸に、弱々しく萎れてしま

った細い眉。

嫌われたくないと縫り付く抱く瞳は、雪音の四肢に甘く危険な痺れを走らせる。
(笑顔も可愛いけれど、泣きそうな顔も同じくらい可愛い。ああ、瞳をうるうるさせた直君を見ているだけで、乳首が疼いちゃう)

幼い少年を優しく糾弾する愉しみが、十八歳の美乳を悩ましい快楽に苛む。思惑一つで少年の感情を転がせる有り様が、雪音の支配欲をじわりと潤わせてくれる。

(このまま鬨つてみたいけれど、自重しなくちゃ)

沸々と湧き上がってくる嗜虐欲を、秘密裏にクールダウンさせる。雪音は愛ある嗜虐はしたいが、無為な暴威を振るうつもりは毛頭無い。

「すぐに嘘を認めて謝ってくれたし、今回は許してあげる」

「え……ほ、本当に？」

今にも涙が零れ落ちそうだった瞳に、映し出された雪音の顔が揺らめいている。救いを求める子羊の如き双眸が、女子大生の保護欲を甘く擦った。

「他の男の人ならぜーったい許さないよ。でも、直君は特別。小さい頃からずっと仲良しの男の子だもの。エッチなことしても、許してあげる」

相手を窮地に陥れた後、こちらから救いの手を差し伸べる。無論、端から見れば全

タイトル

面的に直海が悪いわけだから、雪音の仕組まれた温情には感謝しか抱かれない。

更に、直海だけは男として特別だという付加価値まで付けたのだ。案の定、直海の顔を席卷していた絶望は跡形も無くなり、晴れ渡らんばかりの至福に塗り直されようとしていた。

幼い少年が感情をコロコロと二転三転させる様は、雪音を飽きさせない。何より、直海がまるで慈愛の女神の如く雪音の寛容に畏敬を示してくれるのだから堪らない。愛嬌を振りまく裏で最愛の幼馴染みを掌で弄ぶ恍惚が、女子大生の支配欲を頗る満足させてくれた。

「それにしても……直君、そんなに私のパンツ見たかったの？」

「う、ううん……そんな、こと——」

「あ、私、エッチな子と嘘を吐く子がいたら、嘘を吐かれる方が嫌だからね。エッチでも、正直な子の方が好き」

同じ轍を踏まないよう直海は見栄を張ろうとするが、雪音の差し込みで声を失う。直海はしばらく悩んでいたが、やがて恥じらい混じりに「見たい」と呟いた。

「本当に私のパンツなんか見たいの？ 同級生の女の子のパンツじゃなくて？」

「そ、そんなのいないっ。雪お姉ちゃんのパンツが見たいっ」

正直な人が好き——と、直海の色欲を後押しする一言を免罪符として付け加えておいたからだろう。煽動した雪音自身が驚くほど力強く、直海は己の欲望を言い切った。幾ら雪音の許しを得ていても自分の野卑な願望を口にするのは相当に勇気が必要だったらしく、直海は火を噴かせんばかりに顔を赤くした。

「……そっか。同級生の女の子より、私のパンツが見たいんだ」

「う、ん……だから、ぼく……」

魔が差してスカートを覗こうとした——と、直海は続けたかったのだろう。言葉は続かなかったが、直海が何を言いたかったかは十二分にわかる。

直海の本音が揃った所で、いよいよ年下の幼馴染みを随とすべく、雪音は淫らな企みの口火を切った。

「それじゃ……私のパンツ、見せてあげよっか」

他に誰も居るはずのない部屋を軽く見回した後、声を潜めてそっと直海に囁く。前例の無い過激な誘惑は刺激が強すぎたらしく、若い少年は鳩が豆鉄砲を食ったように、口を半開きにして硬直していた。

「あれ、やっぱり見たくなかった？ それなら別にいいんだけど」

「えっ——ち、違うよっ。み、見たいけれど……な、なんで……」

極上の僥倖を引き上げられまいと、直海は鞭打ちになりそうな勢いで首を横に振る。雪音からのとんでもない申し出に混乱しているらしく、小さな口は開閉するものの意味のある言葉が紡がれない。

「直君が満点取ったご褒美に——と思ったけれど……いらない？」

「い、いるっ。見たいっ」

雪音の前で欲望を隠してはならないと学んだのだろう。羞恥は抱いているものの、顔を赤くしながら直海は己の本心を露わにする。

適当な理由付けとして引っ張ってきた「ご褒美」だが、直海は何ら疑問を挟む様子はなく、寧ろ、自分の努力が思わぬ形で報われたと喜んでいた。

（やる気を引き出すことにかけては、私って本当に教師に向いてるかも）

自身の人心掌握に自画自賛する一方で、淫らな策謀をまったく表情に出すことなく、雪音はくすりと穏やかな微笑みを零した。

「ふふ、それじゃ見せてあげる。ただし、このことは二人だけの秘密だからね。誰にも教えちゃダメだよ」

雪音と秘密を共有できるのがこの上なく背德的で嬉しかったのだろう。直海は迷うこと無く首肯した。自分の魅せ方を熟知している美少女は、音も無くその場で立ち上

がるとしなやかな美脚を伸ばし、まるでローヒールを履いたように踵を浮かせた。

「う、わ……」

行儀良く正座していた直海が、感嘆の声をあげる。巷を歩けば男から二度見される美少女が、本気で魅せるスタイルを取ったのだ。直海が心を奪われるのも無理はない。少年の視線がネイルケアされた爪先に降ろされ、足首からふくらはぎへと昇っていき。ハニーペーじュのパンティーストッキングに輝く十八歳のふとももに、欲望の込められた瞳がじつくりと遡っていった。

視姦される悦美を味わいながら、雪音はブリーツスカート裾をそつと人差し指で摘まむ。

「見て……直君」

ふわりと波打つ黒布がゆつくりと捲りあげられていく。ふとももを彩っていた化粧がランガードによって厚みを増した。たおやかな丸みを帯びていた内腿が僅かにくびれた刹那、女肌ともストッキングとも異なる色合いが雪音の股座に現れる。

（ようやく、直君に私の生ショーツを見て悦んで貰えた）

数年前までは、スカートが覗けるシチュエーションを作り上げても、まるで興味を示してくれなかった少年。それが、今や瞳を目一杯見開き息を止め、膝を浮かさんばかりに首を伸ばして食い入るように見つめている。

タイトル

性に純真なだけあって無自覚で獐猛な肉欲がショーツを貫通し、雪音のクリトリスを甘く疼かせた。

（良い眺めでしょう。直君が一番興奮するランジェリーを着けてきたんだよ）

直海を誘惑しなくてはならないが、あまり派手なランジェリーでは逆効果になると、事前に年頃の少年達の心理を入念に調べ上げている。十八歳の女子大生にしてみれば地味で面白にかけるが、白やピンクを基調としたカラーと奇をてらわない飾り気のないショーツが最善手だ。

（あんまり対象年齢を直君の年代に合わせすぎると、年相応の魅力をきちんと伝えられないのが難しいところね）

直海と同級生ならば、男子はともかく女子は初潮の到来に被ることもあり、急激に大人び始めるものだ。高望みした女子の年齢不相応な下着を直海が目撃していたりしたら、雪音のショーツに目新しい刺激を感じてくれないかもしれない。

（そういう事態に備えて、このショーツにしたんだけれど……効果あり、みたいね）

雪音の選んだショーツはレースこそささやかなものの、布地が大きく縮小された純白のローライズショーツだ。装飾過多や奇抜な色合いの物は穿けるが、布地を減らす

には躊躇する初心な女子には真似できない。

「どうかしら、直君。これが、私のショーツ——女の子のパンツよ」
「ショーツ……女の子のパンツ……」

服飾の知識にはまだ疎い少年にとつて、ショーツというのは初めて聞く単語だったのでろう。直海は視線は股間から外すこと無く、まるで秘密の呪文を知ったように何度も小さく「ショーツ」と繰り返した。

(直君はもう限界に近い感じね。ふふ、予定通り)

牡の本能が無意識に快楽に順応しているのだから。直海の掌が密かに盛り上がって来たショーツパンツに被せられ、拙い指遣いで布越しにペニスを愛撫していた。

心の幼さと身体の成長が一致していないため、少年の意思を無視する形で牡の衝動が快楽を渴望している。直海がパンティストッキング越しのショーツを凝視しているのを良いことに、雪音は淫らかな微笑みを桜色に艶めく唇から零した。

「はい。おしまい」

何の前兆も無く、雪音はご褒美という名の艶事を打ち切る。十八歳の織指からはらりと流れ落ちたプリーツスカートは、一瞬にしてショーツはおろかパンティストッキングのランガードまで覆ってしまう。

タイトル

「ああっ」と、直海が驚愕混じりの悲鳴をあげ、踵に乗せられていた小尻が跳躍するように浮かび上がった。

「これでも、恥ずかしさを我慢してるんだよ。相手が直君だから、特別に見せてあげたんだからね」
「う、ん……」

頭の良い直海のことだ。雪音の言い分はきちんと理解できているのだから。

その反面、未熟な故に抑制のきかない性欲は燻りを隠せない。時間にすればかれこれ一分近くショーツを露出させていたのだが、直海にとつては十秒にも満たない時間に感じられたに違いない。表面上は納得しているが、声には不満と未練が滲んでいる。そうした理不尽な感情を抱かせるのも、雪音の手の内だ。

「もっとショーツ見たい？ 一つ、条件を聞いてくれたら見せてもいいけれど……」
「うん、見たいっ。テストだったら何回でも満点を取るから」

清廉ぶった男子を演じてても、雪音には逆効果だと思っただろう。雪音の妖しげな問いかけに、少年は間髪を入れず望みを口にした。

「うん、それはいいの。代わりに、直君もズボンを脱いで」

雪音の条件が、直海の予想をあらゆる意味で裏切っていたのだから。あれだけ意気

込んでいた少年が「えっ」と声を上擦らせる。

「直君、簡単にテストで満点を取れちゃうもの。私だけ恥ずかしい思いをしているんだから、ここは公平に二人で下着の見せ合いっこしよ？」

直海の年代ともなれば、思春期まっただなかではないにしろ、男女の性差が明確になり下着を晒す恥ずかしさを覚える時期だ。外見は女の子のように可愛らしい少年だが、性別はれっきとした男だ

幾ら色欲にのぼせていた直海でも、さすがにこの提案には返答を窮していた。

（御両親の前ならともかく、私の前だとそう簡単に脱げないよね）

同性の同級生に下着を見られるのも躊躇し始める世代なのだから、恋い焦がれている少女に見られるなど簡単に了承できないだろう。

もともと、そうした少年に媚薬を嗅がせる算段は、とつくにつけてあった。

「ちなみに、今度は見るだけじゃなくても触っていいよ」

「ゆ、雪お姉ちゃんのショーツに、触って……」

男子にとつては不可侵の領域である、女の股座に触れられる機会を与える破格の譲歩。憧れの女子大生により近付きたいと本心では求めるものの、少年の初心な羞恥がそれを許してくれないと、雪音は見透かしている。

タイトル

そんな煩悶とした懊悩を抱えている最中、女体に触れられるチャンスを恵んだのだ。この千載一遇の機会を、むざむざ見過ごすはずがない。

「ただし、対等な条件として、私も直君に触るよ。それでもいい？」

駄目押しに、条件とは名ばかりに優待を付け加える。雪音との距離を縮めたい直海だが、なまじ好きな相手だけに自ら触れるのには相当な勇気がいるだろう。

しかし、女から触れてくれるのであれば、そうした思い切りは不要だ。触れられる恥ずかしさもあるだろうが、見られる恥ずかしさほどではない。裸を見られることを許した女が、男に触れられるのを拒む道理がないのと同じだ。

案の定、直海は「うん」と、迷いを吹っ切って誘惑に乗った。

（直君は得したと思ってるかも知れないけれど、本当は逆なのね）

幾ら雪音が美少女とはいえ、性の接触ができるのなら女子大生よりも若い少年の方が遙かに希少価値がある。無垢な少年を弄る約束を合意の元に取り付けた十八歳は、また一つ己の欲望を達成した快挙に内心喝采を挙げた。

「それじゃあ立って」

ベッドにふわりと腰掛けた雪音は膝に頬杖を突き、直海に起立を促す。座りながら脱ぎ始めたらつぶさに観察できないので立たせたのだが、無論少年はそんな言葉の端

々に淫らな策謀が巡らされているとは露ほどにも気付いていない。
優しい強制に素直に従い、いそいそと正座を解いた。もつとも、いざショートパンツに手をかけたところで、羞恥心が迫り上がってきたのか指先が鈍る。

「直君、無理はしなくてもいいよ。やっぱり、止めよつか」

「う、ううん。一度決めたことだから、ちゃんとやるよ」

何事につけても真面目な直海だけに、結んだばかりの約束を反故にするなどできないのだろう。土壇場での躊躇に迂遠な発破をかけると、直海は意を決してショートパンツの留め金を外した。ジッパーが遅々と剥かれ、腰回りをびったりと覆っていた布地がゆっくりと降ろされていく。

（やっぱり白のブリーフを穿いていたんだ。童貞らしくて、とつても可愛い）

時折、驚塚家の物干し竿に白いブリーフが風に揺れているのは知っていたが、こうして現実に直海が穿いているのを目視し、雪音は胸を躍らせる。

女から見ればお洒落からほど遠い下着だが、純粹な少年が穿けばそれはたちまち幼稚な愛らしさを醸し出すアイテムへと早変わりした。

（直君のおちんぼ、すっごく布地を張り詰めさせてる。触るだけなんて生殺しよ。顔ごと擦りつけて、思いつきり頬ずりしたい）

タイトル

ショートパンツを足下に落とした少年が、恥ずかしげに両膝を擦らせ弱々しく内股を作る。その罪作りな仕草は、涼しげな微笑みを形作る桜唇の裏で、興奮の溶け込んだ涎を口蓋から滴らせた。

「ほら、直君。こっちにおいで」

淫靡な感情に沸き立つ情欲を長年培ってきた愛嬌で蓋をし、優しく直海を誘う。右隣のマットレスをぼんぼんと軽く叩き、座るべき場所を暗に示した。

場の主導権を握られた少年は道端で拾われた子犬の如く、おっかなびっくりとした足取りでベッドの縁により、ブリーフに覆われた幼尻をベッドへと載せた。

（こんな反則な格好されて、エッチな気分にならないはずがない）

シャツはきちんと着ているのに、ブリーフだけが丸見えになった年幼い少年のあどけなくも背徳的なフアッション。ショートパンツに隠されていたつるりとした健康的な小尻を見ているだけで、強烈な酒精を嗅いだように頭がくらくらした。

（ああ、押し倒したい。今すぐ直君の童貞を食べちゃいたい）

何年もの間、収奪の時期を見定めて忍耐を重ね、愛欲に鉄の自肅を引いてきた。それだけに、少年の身体がすぐ隣に在る状況は雪音を狂奔させる。

透明な産毛しか生えていない小さな太股や、恥ずかしげにもぞもぞと動く足指。そ

うした清らかな純情とは相反する、ブリーフをこんもりと盛り上げる少年の獣牙が、最高にアンバランスなエロティシズムを生み出していた。

「あの…：雪お姉ちゃん…：」

「何？ どうかしたの」

少年の撒き散らすフェティッシュな色気に惑わされていた雪音は、直海の呼びかけによりようやく我に返る。さりげなく桜唇に指を這わせるが、幸いなことに涎が垂れてはいなかった。

（ああ、そうか。早く私のショーツを見たいのね）

ショートパンツを脱いだことで、常にブリーフを晒すこととなった直海だが、一方で雪音はスカートを一時的に捲つただけでショーツは覆い隠されたままだ。

雪音がなかなか交換条件を履行してくれないので我慢し切れなかったのだろう。少年は欲情の込められた視線をいじらしくブリーツスカートへと注いでいた。

「はい、どうぞ。スカート捲っていいよ」

そんな慎ましい直海を後押しすべく、雪音はセルフサービスへと切り替える。

「そ、そんな…：ぼくが雪お姉ちゃんの…：なんて…：」

これまで雪音が主導してきた淫行が一部とはいえ委譲され、幼い少年は大いに動揺

タイトル

する。

（焦らさないで直君。お姉ちゃん、早くおまんこ触って貰いたくて仕方ないの）

少年の愛らしい葛藤を悠長に眺める余裕は、残念ながら今の雪音にはない。年下の幼馴染みと淫らな行為に耽られる悦びが、十八歳の心音を昂ぶらせる。間近から漂う幼い少年の匂いが、フェロモンさながらに女体を妖しく火照らせた。

「あっ—ゆ、雪お姉ちゃん」

煮え切らない直海を後押しすべく—何より、直隠しにしている淫猥な欲望を叶えるべく、直海の左手を取りスカートへと導く。

「ほら、大丈夫だから捲ってみて」

雪音の纖手よりも小さな掌を包み、ゆっくりと指を握らせる。直海の指は緊張で先端まで強張っていたものの、ふとももに被せられていたブリーツスカートはいとも容易く引き上げられていく。

十八歳の美少女の魅力をこの上なく引き立てる、純白のローライズショーツが再び露出させられた。パンティストッキングに走るセンターシームが、ローライズショーツの中央へと引かれ、女子大生の媚丘を浮かび上がらせる。

直海の一途な獣欲が再び双眸を大きく見開かせ、興奮を抑えきれない呼吸が鼻梁を

ひくつかせた。

「触っていいよ。ほら、持っていてあげる」

直海に被せていた右の掌を引き上げ、入れ替わるようにして左手でスカートを深く巻き上げる。パンテイストッキングのウエストテープが現れ、化繊に覆われていない生の下腹が瑞々しい白さに輝く。

「雪、お姉ちゃん……」

辿々しく雪音の名を一言呟いてから、直海はスカートを握り締めていた指を離す。ハニーベージュの輝糸に透けたローライズショーツに、まるで子犬が未知の物体に怖々接触するように、人差し指が伸ばされた。

「あつ、んっ……」

柔らかな指先がセンターシームにそっと押しつけられる。凄まじい快美が十八歳の肌理を波及し、甘美な感電が女体を痺れさせた。

(凄い……こんなに感じるなんて……)

これまで持ち前の愛嬌で少年への愛欲を隠匿し、鋼の意思で自制を敷いていたのに、思わず漏れてしまう発作染みた喘ぎ。ショーツ越しとはいえ、初めて少年に股座を撫でて貰える悦びに、美麗で淫靡な処女は感動混じりの恍惚に打ち震える。

タイトル

柔らかなふとももがビクリと牝の発作を起こし、しなやかなふくらはぎが膝から跳ねる。足指が鉤を作り、ストッキングに透けた爪先が絨緞をあえかに引つ搔いた。

迫り上がってきた艶声を堰き止めることができず、強く引き結ばれた皓齒の隙間から切ない嬌声が漏れ出た。

「わあっ……ご、ごめんっ。雪お姉ちゃん」

そんな女の心境など知る由も無い無垢な少年は、これまで共に過ごしてきた一度たりとも聞いたことの無い甘い声に吃驚したらしい。自分の触り方が大好きな女に痛みを与えてしまったと勘違いしたらしく、慌てて指を離す。

「っ……だ、大丈夫だよ。ここは、女の子にとって敏感なところなの。直君に触られてドキッ……してただけ」

女の局部に触れるという、今までとは段違いに濃密なスキンシップは、雪音の想像を遙かに超える快悦をもたらしていた。辛うじて平静を取り繕うものの、代償に発散仕切れない悦美の熱が女体に籠もる。

(ショーツ越しにおまんこ撫でられちゃうだけで、こんなに感じるのね……これなら、直君のおちんぼでバージンをストしたら……)

直海をオナペットにして耽る自慰行為とは、比べものにならない快感が得られるか

もしれない——そう夢想し、雪音は甘い戦ぎに背筋を震わせた。

「直君、優しいね。いっぱい触りたかったのに、私を心配してくれるなんて」

「だ、だって……そんなの、当たり前だよ」

女体を席卷した快悦を勘付かれないよう、直海を褒めることで雪音は注視されるのを退ける。何気ない気遣いを褒められた少年は、不安を氷塊させ、喜悅と羞恥に視線を戸惑わせた。

「まだまだ触りたいでしょ。今度は、指を全部使う感じで触ってみて」

女体を駆け抜けた甘過ぎる痺れが落ち着きを取り戻すも、十八歳の色欲に飢えた身体は、より深い刺激を貪欲に求める。素直な少年は忠実に従い、指を揃えた掌を柔らかに女の股座へと滑り込ませた。

「んっ……ああっ……は、あっ……」

愛しの少年が迪々しく媚丘を撫でると、雪音の肢体を再び喜悅の泡に包んだ。小さな掌の温もりと感触に、乙女の牝華は薄布越しに淫らな悦びを謳う。

年上の女子大生が幼すぎる少年から性の愛撫をして貰う禁忌の悦び。誰にも自慢できず、誰にも知られてはならない背理のシチュエーションに、雪音は華やかに酔った。(嬉しくて堪らないのに、辛くて涙が出そう。こんな気持ち良いのに、思い切り声を

タイトル

出せないなんて生殺しよ)

直海の愛撫は雪音の手淫と比べれば文字通り児戯に等しいが、男と違って女の快楽は大半が妄想から生み出される。いつか叶う夢を見て脳裏の中でぼんやりと思いつかべていた冒流的なまでの淫事が、現実となっている。

最高のシチュエーションに溺れ、十八歳は目も眩む愉悦を一身に浴びた。

もし本能に身を任せられるなら、今頃シートに爪を立て美脚を宙にばたつかせながら、窓ガラスに亀裂が入らんばかりの悲鳴染みた嬌声を叫んでいるだろう。

それなのに直海の前では本性をさらけ出すまいと惨苦たる自制を重ね、細かく肢体を震わせる程度に悦びの発露を留めている。

こんな辛い我慢は、生まれてこの方初めてだった。

「あの……雪お姉ちゃん。顔色がなんか……」

もつとも、幾ら雪音が強靱な精神の持ち主でも、我慢には限度がある。発露がままならず身体に沈降していくばかりの色欲は美少女の肉体を淫らに炙り続け、瑞々しい雪膚を朱く染めていった。

吐息も徐々に乱れ、大きく胸を上下させているのだから、幾らショーツへ夢中になっている直海とて気付かないわけがない。

「大、丈夫だよ。直君に……股を触られるのが気持ち良いだけなんだから」

性知識の無い直海といえども、いつまでも欺くわけにはいかない。直海が不信に思いつめるだろうし、何より性知識に疎い少年と恙なくセックスするには、ある程度は女性の仕組みを知らせておく必要がある。

段階的に情報を開示するも、性感というものを把握していない少年は気持ち良くなるという表現がわからないらしく、小首を傾げた。

「そうね……ドキドキしてくる——って感じかな。直君とこうして二人きりで、秘密の触り合いをしてみると、なんだか胸とか——」

一度言葉を切ると、右手の人差し指をすりと伸ばし、ローライズショーツのフロントをトントンと柔らかく突く。

「ここが、ね……とつても熱くなって、ドキドキしてくるの」

「雪お姉ちゃんも……ここがドキドキ……」

咄嗟により直海に共感を得られやすい表現に変えるが、どうやら雪音の判断は正しかったらしい。幼い少年の優しき懸念は、腑に落ちたように瞳から霧散した。

「直君も……ドキドキ、してる？」

「う、ん……僕も……してる」

タイトル

何処が——と、恥ずかしさから少年は明言しない。だが、言葉にしないからこそ、最も興奮している箇所が浮き彫りにされる。

「それなら、二人で一緒にもっとドキドキしよっか」

〈体験版終了〉